

## 第5回武蔵村山市立小・中一貫校カリキュラム作成委員会会議録

日 時	平成20年2月7日(木) 午後3時から午後5時00分まで
開催場所	武蔵村山市役所 406会議室
出席者	委員長、教育部長、副委員長(第四小学校校長)、委員(第二中学校副校長、第四小学校副校長、第四小学校教務主幹、第四小学校研究主任)、専門部会員29名 事務局(小・中一貫校開設準備室長ほか)
欠席者	教育長、副委員長(第二中学校校長)、委員(第二中学校教務主幹、学校教育担当部長、I指導主事、J指導主事)
事務局	<p><b>1 あいさつ</b></p> <p>本日はお忙しい中、第5回武蔵村山市立小・中一貫校カリキュラム作成委員会にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。本日は各教科領域部会の第7回部会(一部部会については第8回部会となりますが、)との合同開催となっております。協議内容に入りますまでの間、大変恐縮に存じますが、司会進行の方、事務局の方で務めさせていただきます。よろしく願いいたします。それではお手元の会議次第に則りまして進めさせていただきます。まず始めに武蔵村山市教育委員会より御挨拶を申し上げます。次第では持田浩志教育長となっておりますけれども、所用の為、代わりまして教育部長より御挨拶申し上げます。</p>
教育部長	<p>皆さんこんにちは。また昨日は武蔵村山市の公立小学校の研究発表会が開催されたので、本日御参会の小学校の先生方には連日の出張となり、大変ありがとうございます。本来でありますと持田教育長が本席にて御挨拶を申し上げるところでございますが、本日は平成20年度予算を控えて、理事者会議が行われておりまして、そちらの方に出席をしている関係で本委員会の方には出席できませんので予め御了承いただきたいと思っております。尚、私の方から一言御挨拶をさせていただきたいと思っております。</p> <p>本日は、お忙しい中、「第5回武蔵村山市立小・中一貫校カリキュラム作成委員会」に御参加いただき、誠にありがとうございます。</p> <p>ただ今「第5回」と申し上げましたが、思い起こせば第1回の委員会が開催されたのは昨年(平成19年)の5月18日のことでした。時間の経つのは、本当に早いものだと、最終回である今日を迎えて実感しております。</p> <p>この1年間、委員長、副委員長をはじめ、10名のカリキュラム作成委員会委員の皆様、国語、社会等計14部会、54名の部会員の皆様、本市の重要課題であります小・中一貫校カリキュラム作成にあたり、多大なる御労作、御尽力に心から感謝申し上げます。</p> <p>委員会は計5回、そして14教科・領域部会のはのべ100回の部会を開催していただいたということで、皆様、本当にご苦労様でした。</p> <p>今、各委員のお手元には、「(仮称)武蔵村山学園の教育について」と題するカリ</p>

	<p>キュラム作成委員会報告書の案がございます。非常に分厚い、ページ数の多いこの報告書案ですが、これは、小・中一貫校だけではなく、本市の義務教育の向上に向けて、非常に重要な基底資料となると考えております。</p> <p>すでに御案内のとおり、本市の小・中一貫校は、多摩地区初の校舎一体型小・中一貫校として、平成 22 年 4 月に開校いたします。これまでも事務局から様々な場面でお話をさせていただきましたが、本市の一貫校は、教育開発特区等、特別な教育課程の枠組みを申請せず、現行の学習指導要領に基づいて義務教育 9 年間で意図的・継続的な指導を展開することとなっています。このことは、本市の小・中一貫校が、本市の全小・中学校における小・中連携教育を推進する上でのパイロット校の役割を担っていることを示しております。</p> <p>さらに、国においては、今まさに、新学習指導要領の告示を控えた時期となっています。1 月の中教審答申には、「発達の段階に応じた学校段階間の円滑な接続」に留意する必要性が指摘されており、中学校 1 年生での学習面・生活面の多くの課題に対応するためには、小・中学校 9 年間を見渡した効果的な指導が求められています。このことから、本市の小・中一貫校カリキュラム作成委員会の取り組みは、まさに正鵠を射たものであると考えております。</p> <p>来る平成 20 年度は新学習指導要領の周知期間であり、平成 21 年度から移行措置要領に基づき、新学習指導要領への移行が行われます。その際、本委員会に作成していただいた小・中学校 9 年間の教科・領域ごとの年間指導計画が各校においても活用されると考えております。</p> <p>繰り返しになりますが、1 年間にわたり御指導をいただいた委員長、そして本委員会のために御尽力いただいたすべてのみなさんに感謝申し上げます。私からの挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。</p>
事務局	<p>それでは続きまして次第の 2、「全体会」ですが、小・中一貫校開設準備室長 石田より 2 点、御説明申し上げます。</p>
事務局 (室長)	<p><b>2 全体会</b></p> <p><b>1 本日の会の進め方について</b></p> <p><b>2 報告書案について</b></p> <p>それでは、ここからはカリキュラム作成委員会と各教科・領域部会とに分かれて会を開催します。</p> <p>カリキュラム作成委員会は、406 会議室に移動をお願いします。</p> <p>各教科・領域部会の皆さんは、恐縮ですが、この場でお互いに座席の向き等を変えて、協議をお願いします。</p> <p>本日は、欠席されている部員がいらっしゃり、また、カリキュラム作成委員会と併任している部員がいる関係で、生活・総合部会、家庭科部会は 1 名となります。申し訳ございません。</p>

事務局	<p>401 大集会室には、私がおりますので、何かございましたら、お声をかけてください。</p> <p>おおむね5時を目途に協議をお願いします。終了次第、適宜、解散をお願いします。</p> <p>以上です。何か、この場での御質問はございますか。</p> <p>それでは、どうぞよろしくをお願いします。</p> <p>それではこれから、カリキュラム作成委員会と各教科領域部会とに分かれて会議を進めていただきたいと思います。カリキュラム作成委員会の皆様は406 会議室に移動をお願いいたします。また各教科領域部会の皆様はこの後、大変恐縮なのですが、席を移動していただいて、席を合わせる形で協議を進めていただきたいと思います。大変恐縮ですが、石田から説明をさせていただいたとおり、理科部会と生活・総合部会、家庭科部会は1名ずつの参加になっております。401 大集会室には私がこのまま残りますのでよろしくをお願いいたします。会議は概ね5時をもって終了させていただきたいと思います。</p>
事務局 (室長) 委員長	<p><b>3 カリキュラム作成委員会 406 会議室にて</b></p> <p>それでは、はじめに委員長から御挨拶をお願いします。</p> <p>本日は第5回目でございます。どうもお疲れ様でございます。この間に中教審の答申があつたりいたしまして、皆さんももうお聞きになっていらっしゃると思いますが、皆さんが御検討いただいた内容がまさに中教審の答申と軌を一にするというか、むしろ裏付けを与えてくれたような内容になっているかと思えます。生きる力というのはこの理念を引き継ぐというふうに改訂の最初のところに出てまいります。それは、まさに生きる力というので、もう少し具体的に言うと人間力を育成することだったわけですし、人間力の基が生きる、その基が自己教育力というような系譜の中で生まれた言葉でございます。皆さんからいろいろ御検討いただきましたことが、実は文科省の方針にもそういうものであったということを確認させていただいたらありがたいと思えます。一昨日広島県の廿日市市の宮島中学校へ行ってまいりました。これがその学校の研究報告なのですが、ここは人間力を開発することということで、幼・小・中一貫なのです。この4月から、一貫校として発足なのです。クロスカリキュラーの柱としては、英語活動とそれからキャリアエデュケーションを各教科の中に入れていくということでした。今のところはまだ総合的な学習の中でやるとか、学級指導でやるとかというのが多かったのですが、1つだけ社会科で、いわゆるキャリアエデュケーションを取り入れた授業がありました。午前中からの研究発表をいたしまして、幼・小・中というのはいいなあという感じがしました。例えば英語劇がありまして、英語活動の英語劇をやるのですが、宮島の</p>

地元である物語を、宮島というのは非常に歴史のある所なので、その逸話があるのですが、それを英語に直してですね、園児から中学生までが1つのストーリーで30分間ぐらいに渡る演劇をやったのですね。もちろん全部英語でやるわけですが、それに中学3年生が解説を加えていくというやり方でね、幼稚園の子供たちもこんなにやるのかなというふうに思いました。それからもう1つ思ったのは、音楽の発表会とか色々ありましたが、中学生が小学生を労わる姿が外から見ていてもよく見えるのですね。小学生が、お兄ちゃんお姉ちゃんというのですかね、中学校のお兄ちゃん、お姉ちゃんにすがっていくといいでしょうか。そして私が一番いいと思うのは、そこの講演でも話したのですが、共感的理解力が育つこと、小・中一貫校のヒドゥンカリキュラムというのですか、見えないカリキュラムというのが、表にあるカリキュラムと裏にあるカリキュラムという言い方を教育学でするのですが、例えば教室環境というのはヒドゥンカリキュラムであると、教師の服装もヒドゥンカリキュラムである。笑顔も、もちろん怒る顔もそうなのですが、教養もヒドゥンカリキュラムである。いかに上手に教えても、教師の姿勢によってはうまく授業がいかないというのはヒドゥンカリキュラムがよくないからなのだというような教育学の研究が今までにあるのです。まさに小・中一貫の授業、一貫と連携というのは、使い分けがいろいろ難しいかもしれませんが、要するに小学校のお子さんと中学校のお子さんがある授業の中で、一番大きいのはヒドゥンカリキュラムの効果じゃないかと思います。「お兄ちゃんはある考え方をする、お姉ちゃんはある考え方をする。」逆に中学生は、自分は通り過ぎた後なのでしょうけれども、小学生はある発想があるのだというね。そしてもう1つは今流行というか、学習活動で一番注目されているのは、暗黙知と形式知なのですね。一つの言葉を黒板に先生が整理されたのは形式知になるわけですが、それを組織知に高めていくというのが学習活動で必要なのです。それをもう一つ高めて、それを集団知と呼んでいるのですが、これを組織知に高める。そのところで小・中一貫校という、両方のお子さんがある授業というのは、すごい能力を発揮するかなということです。また機会があったらお話をしてみたいと思います。時代の流れというのではなくまた、毎時間小中の子供がいっしょにやるというのではないが、ある単元があるところで集中的にやっていくというのが非常に効果的だということを、一昨日の授業を観ながら、校長さんと後で話したり、終わって職員の皆さんと一人一人と話したりした中で感じました。また、先生方もそういう感想をお持ちでした。ということで、この一貫校というのは新しい意味でのというよりも、一つの、子供たちに今一番劣っている共感的理解力を高める。教師がそんなに努力しなくても小・中のお子さんがあることによって高まっていくという、そういうヒドゥンカリキュラム、見えないカリキュラムのよさというものを皆さんにお伝えしたいと思いました。

今日はいよいよ最後のまとめになろうかと思っておりますのでよろしくお願ひしたいと思ひます。

今お話がございましたが「(仮称) 武蔵村山学園の教育について」を中心にとい

<p>事務局 (室長)</p>	<p>うことでございますので、これを出していただきまして、最初に目次のところを見ていただきますと、「第1章 武蔵村山市立小・中一貫校の基本理念」でございますので、そのところを事務局のほうで御説明をいただけますでしょうか。</p> <p><b>報告書作成</b></p> <p><b>第1章 武蔵村山市立小・中一貫校の基本理念</b></p> <p>それでは事務局から御報告します。まず、報告書案は総計 400 ページにわたる膨大な内容となっています。昨年の5月以降、カリキュラム作成委員会の4回に渡る検討と、同教科・領域等部会 14 部会の8回に渡る検討の結果と、委員会開催の前後や部会開催の前後に執筆分担に従って御執筆いただいた内容について、事務局で整理し、形式等を整えて、1月下旬に各委員にお届けしたものです。</p> <p>これから御説明する第1章から第2章は、第2回委員会及び第3回委員会に御協議いただいた内容を踏まえています。</p> <p>それでは、第1章について御説明いたします。</p> <p>ここでは、市立小・中一貫校の基本理念についてまとめてございます。大きく5項目に分かれています。</p> <p>第1章1は、中央教育審議会答申と(仮称)武蔵村山学園についてです。中教審答申に示された「生きる力の育成」と本市の一貫校の目指す「人間力の育成」は共通しているということや、「発達の段階に応じた学校間の円滑な接続の在り方」について記載されております。</p> <p>第1章2は、(仮称)武蔵村山学園の役割についてです。本市の小・中連携教育の発信校としての役割を(仮称)武蔵村山学園は担っているということを中心に記載されております。</p> <p>第1章3は、(仮称)武蔵村山学園の教育目標について記載されております。</p> <p>第1章4は、(仮称)武蔵村山学園が目指す子供像について記載されております。</p> <p>第1章5は、(仮称)武蔵村山学園が目指す教師像について記載されております。</p>
<p>委員長</p>	<p>ありがとうございました。それでは皆様から御意見御感想を出していただきたいと思えます。よろしく願いいたします。</p>
<p>E 委員</p>	<p>一貫校では人間力の育成に視点をおいて教育に取り組むということですが、率直に申し上げて、今学習指導要領の改訂の方針につきましても7項目のうちなんと4項目が学力にかかわることで、先ほど委員長が指摘された小・中一貫校のポイントですね。無論、人間力の育成は非常に重要ですがけれども、ここには前面には出ていませんけれども、学力の向上というものは常に我々は意識して取り組まなければならないのだらうなと思えます。</p>
<p>事務局</p>	<p>御指摘いただいた点につきましては、「生きる力」「人間力の育成」に共通して重</p>

(室長)	<p>要な点であると思いますので、その点については、教育目標、目指す子供像、目指す教師像に反映していくべき点かと考えます。</p>
委員長	<p>人間力の育成というのが6ページにございまして、そこでは総合的な力というのが文章の中に出てきますが、知性というものはもともと学力なのですけれども、今おっしゃるように、後を読むと「心」と「自分」と「未来」ですね。私も何か知的なものが欲しいなとは思いました。どういう言葉がいいのかというと具体的に言えないのですが、「心やさしく」「自分に強く」というのは一行でもいいかなと、二行目のあたりに何かこう知的なとか、まあ学力という生の言葉がいいのか、もう少し学力を含む何か包括的な言葉がいいのかというのは、ちょっとまだ具体案がありませんけれども、学力に近い言葉が欲しいな。もともと人間力というのは学力が基盤になっているのですよね。だからそれを受けてどこかにやはりないと、飛んでしまうかなと、これは私の感想です。</p> <p>また事務局の方でそれを検討していただけますか。</p>
事務局 (室長)	<p>承知しました。これまでの検討の中には「英知を拓く」というような言葉があります。「英知」とは「知識」とも言えます。ただ、単に「知識」ではなく「英知」と言った場合、「優れて深い知恵。高い知性」を表すので、教育目標の中の「未来を拓く」の部分を「英知」という言葉が入るように整理したいと考えます。</p>
E 委員	<p>個人的には賛成なのですが、子供の実態を見ていると、教師は責任がすごくかかっているなど、かなり努力しないと英知あふれないなど。でも、目標は目標で、子供もそういうのを聞かされていたら隠れたカリキュラムではないですけれども、やはり言葉が子供たちに影響するものもあるでしょうから、教師の心構えとして決して悪いというわけではないと思います。ただ、相当な努力が必要だと思います、実質上。</p>
C 委員	<p>溢れないまでも、「磨く」とかですね、「高める」とか、その最後に「溢れる」というのはどうでしょうか。</p>
E 委員	<p>目標は目標でよろしいかと思います。</p>
委員長	<p>その辺でいかがですか。それと合わせてその下の「目指す子供像」のところの、「知的能力を身に付けた児童・生徒」というのは、あるいはそこに基礎・基本的な学力という言葉が下に入ってもいいかもしれませんけど。ここは具体的な話なので基礎学力という言葉になっていますけど。「4（仮称）武蔵村山学園が目指す子供像」のところの解説に基礎学力というのがありますよね。このところがもう少し強調した言葉になるといいかと、基礎学力で足りているのですけれども。文科省</p>

	<p>的な言葉を使えば、基礎・基本的な知識、理解とか技能とかと言うように、もうちょっと強調してもいいかもしれませんね。</p>
事務局 (室長)	<p>これを「めあてをもって、自ら学び続ける子供（知的能力）」の中に入れていくということでしょうか。</p>
委員長	<p>私はそこのところは知的能力という言葉がはっきり入っていますから、ここに学力という言葉を使うと何か生々しい感じがいたしますけれども。もう1つ、文科省は「確かな学力」というのは今回も引き継ぐのだというのははっきり言っていますが、そういう言葉がどこかにもあっていいかなという気がします。</p>
事務局 (室長)	<p>もしこの場でこうという御提案がなければ、本日の協議を受け、事務局で整理し、お二人の副委員長に提出して決定していくというようにしたいと思います。</p>
委員長	<p>ちょっと1つだけ私の感想を。実は昨日、新幹線で大分時間があつたので、じっくり読んでいたのですが、例えば4ページの「小学校段階に比べ、授業の理解度が低下したり、問題行動等が増加したりするといった多くの教育課題に対して、具体的にどのような教育活動を展開することで解決していくか、」等々ですね、これは中教審の中にも出てくるのですね、飛躍しているのです。実はこのところは、一貫校にすることのメリットなので、むしろ上とのつながりというのですか、「校舎一体型の一貫校になるため、教職員の一体的な指導が可能となる。」から「小学校段階に比べ、」になる、そこのところのつながりがどうかという気がします。要するに役割というのはそれが「広げていくことが可能となる。」それでいいのかなと。むしろ私が感じているのは、小・中の児童・生徒が一緒になることによって、お互いに子供たちが理解しあえる、共感的な理解力が高まることによってそういう問題行動に対処できる可能性が高いと、もうちょっと踏み込んでいってもいいかなというふうに思います。これは大田区の連携校、大森三中に行ったときにも、一番のメリットというのは、共感的理解力を子供たちが高めてくれることだというようなことを言っていましたので、何かそのような言葉を使ってもいいかと思います。</p>
事務局 (室長)	<p>委員長の御指摘により、再度整理いたします。</p>
委員長	<p>一番私が気になったのは、これを読んでいて、中教審から入ったほうがいいのか、それとも最初に、本市のことはこうなのだという理念を、こういうふうやってきたという内容から入り、そして補足的に、例えば中教審の答申も同じようなことを、同じようなというと変ですけども、この裏付けを与えてくれたというふうに言った方がいいのかということです。やはり本市の基本構想なので、本市はこう考えて</p>

きたということを前面に出して、後から中教審が出てきたわけですから。それはまさに中教審はこういうふうに言っているという裏付けを与えてくれたというような方がいいのではないかと思ったのですが、いかがでしょうか。いきなり中教審が出てきたので、これは間違いではないのですが。中教審の言っている、3ページですか、引用していただいて、大きな課題を抱えているとか、小から中に行くとき非常に授業の方法も変わるからだと思うのですが、理解しにくいとか、アンダーラインを引いていただいて、まさにこの問題というのを、我々は考えてきたわけなので、その裏付けを与えてくれているわけなのです。そういうふうな構成ができるのかなと思います。あるいはもう1つ上の方のアンダーラインは3箇所ございますが、最初のところにも「自立的に生きる基礎を培う」という、これは人間力の基本でございますので、そのような基礎をちゃんと中教審は与えてくれているというふうな理由ができると、我々が考えてきたことがまさにそうなのだというふうに書けるといいかなという気がしたのですけれども。まあこれは私の感想です。それからクロスカリキュラーについても、今3ページの一番下の7のところ「社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項」として、中教審はいっぱい挙げておりますけれども、ここで御検討いただいたのは、「情報教育」と「キャリア教育」とそれから最後の「心身の成長発達についての正しい理解」の「心の教育」ですね、それから言語事項については「学習指導要領改訂における教育内容に関する改善事項として7点示されている。」その最初に挙がっていますね、ということです。それも考えてきたということがあって中教審もこういうふうに挙げています。さらに「ものづくり」と「食育」と「安全教育」が挙げておりますが、当然これらも必要なことだと思います。という裏付け的な書き方ができると、本市で今まで皆さんが検討されてきたことが、まさに時代の流れに沿っていたのだというふうな受け取り方ができるかなというふうに思うのですけれども、いかがでしょうか。

E 委員

私もきっとオリジナリティを出そうと思ったら先生のおっしゃるような論の展開の仕方がよろしいかと思っています。都の論文とか書き方とか、様々な研究の書き方の中で、最初に法規的なものを打ち出して、それプラス現在の日本の教育の状況を打ち出して、そこからずっと下りてきている展開が非常に多いのですよね、それがノーマルなのです。これもそれに沿っているのですよね。ところがきっとこれがもし大学で先生のゼミを取っていて、これで出すと先生は「中教審のいうままなのですか、あなたの考えは何なのですか。」と言われそうなのですよ。その問題点として、それは我々もOKだし、地域の人たちにもその方が説得力があるとは思いますが、ただ心配なのは例えばこれが上に上がったときに、都教委がどう思うとか、考えたときにちょっと不安にはなります。ただし我々が考えたことは中教審と同じ路線に沿っているというのはもう確実なわけで、それを表に出すか出さないかの問題ですよ。だからリーフレットみたいなものには出して、我々

	<p>が考えていたことは中教審も考えているよという形のリーフレットにして、これはこれで置いておいてもいいのかなと思いました。</p> <p>東京都との関係でそういう問題っていうのは大丈夫なのですか。</p>
<p>事務局 (室長)</p>	<p>東京都教育委員会と市教育委員会とは密接な連携をとっております。本委員会の報告書についても作成後、都教育委員会に情報提供をいたしますが、報告書の内容そのものについては、本委員会委員の皆様全員の協議や作業の結果ですので、足りない部分や気付かなかった視点についての指摘は指導としていただいておりますが、この時点では、内容についてこう書かなければならないということはありません。</p>
<p>委員長</p>	<p>私はできるだけ本委員会の各委員が御苦労なされたので、その主体性を中心にして、もちろんそれが外れていると色々問題があるのですが、全く外れていないので、むしろ中教審がその裏付けをちゃんと書いてくださっている、したがって分かるような囲みで入れてはいただきたいと思うのですが。</p>
<p>事務局 (室長)</p>	<p>いわゆる文章のなかに織り込むのではなくて、囲みで表記するということでしょうか。</p>
<p>委員長</p>	<p>今、色々入っていますよね、だからそういうのは入れていただいて、アンダーラインが引いてございますけれども。それがまさに裏付けになっていますので、それを入れていただきたいと思います。まずは一貫校の基本理念という章の名前であるとすれば、中教審も同じようにこう言っているよというところで中教審の引用を入れていただくというのが私の考えです。それは削ってはいけないと思いますけれどもね。私も新幹線の中で読んでいて、基本理念というのにいきなり中教審がでてきたので、ということなのです。いかがでしょうか。</p>
<p>事務局 (室長)</p>	<p>それでは、第1章の構成そのものについて再度事務局で整理して、委員長、副委員長に報告します。この報告書は市内全教員に配布する予定ですので、中教審の答申文の引用については、特に小・中一貫校に関する部分については原文引用がはっきりと分かる形で掲載することによって、各教師に確実に伝わると考えてこのような構成で整理させていただきました。</p>
<p>委員長</p>	<p>8ページの、研究・研修を進める必要があるというので幾つかございますね、このところはもうちょっと整理した方がいいかなと思います。あるいはなくてもよいかない気もするのですが。私が思ったのは、これまで一貫校と多少関わった経験から申し上げますと、要するに小・中のお子さんが一緒に授業をするのは「協調学習」、(コラボティブなラーニング) と言うのですが、協調学習の在り方を追究して</p>

いくとか、そういうような具体性のある内容でいかがかなと。もう1つは「モデル学習」という言い方を教育学でいいますが、「モデル学習」というのは、お兄ちゃんお姉ちゃんが勉強している様子をモデルにして自分も勉強してみようというような姿勢を学ぶことですね、これは同じ学年でも出来るのですね。お友達が「ああ、ああいう考えか。」という、そこを先生が一言、「Aの考えはすばらしいと思わないか。」という、A以外の児童や生徒は「なるほど、ああいうふうに考えればよかったのか。」という、これをモデルにして学習するのですね。これは集団学習のよさなのですが、これに異学年が入ってくると、もうちょっと違ったモデル学習が出来るようになると思うのです。それがヒドゥンカリキュラムの意味なのです。そういう研究で授業を通じてもう少しやっていくような項目があってもいいかなということ。もう1つは、8ページの囲みの中の下から3行目の「言語力育成、情報リテラシー育成、キャリア教育、心の教育等、現代的教育課題への対応について」、むしろこれは積極的に教科の中にどうクロスしていくか、横断化していくかの研究とかね、というように入れていただけると、研修の具体性が出てくるかと思えます。私は教科横断的な授業という、これはピサのクロス・カリキュラー・コンピデンスという概念ですが、そこにも出てくるのです。恐らくこれは、私の推測もありますが、中教審にこれが出てきたのはピサを意識していると思うのです。現代的な課題というので、中教審は7つ挙げたのだと思えます。本市はもう既に4つを挙げてやっていたわけなので、その辺はむしろ我々の方が先駆者なのです。それを教科にどう入れていくかというのは、非常に大切だけれども難しい。教科領域に入れていくわけですが、その研修というのを本市が先行的にやるというのはいいかなと思えますので、対応よりも教科の中にどう横断化させていくかというふうになさったらいかがかなと思えました。私は研修してもらいたいのは協同学習ですね。いわゆるコラボティブラーニングというのはこれから、例えばネットを使ってコラボティブなラーニングをやるといのが流行っているわけですね、地域が離れていて、例えば桜の開花期をずっと方々の学校が協力をして学習していこうという、これもコラボティブなラーニングなのです。異年齢の人たち、あるいは地域が違うとか、そういう人たちが一緒にやっていく学習というのは、これからの教育の1つの方向だろうと思うのです。これが小・中一貫の1つの特徴なので、その辺のところは気付いたところなのですが。

G 委員

研修の点でいくと、来年度の研究について、今計画を立てているところなのですがけれども一応、理科・数学関係については、系統性があるので、先生達がどう連携がとれるかというのをやってもらって、国語や英語とかの部分については一緒に学ぶ場面をたくさん作ってもらいたいということで、目黒では交流学习というのをやっていたのですがけれども、子供たちが一緒にやるのはどういう授業形態で、そこで工夫するのは何だろうという研究を進めていきたいというふうに思います。後は体育とか図工だとかいわゆる芸術・芸能部分については子供と一緒にやる学習を含め

	<p>ながら専門的な教員が関わることが出来るので、そこら辺の先生達の協力関係がどう組めるかという、3つの分科会に分けてそれぞれ課題を持って、来年は取り組んでみようかなというふうに提案をしているところなのです。やはり小・中一貫なので子供と一緒に出来た部分というのがかなり大切だと思います。</p>
委員 長	<p>それが協調学習なのですね。一緒にやるのをどうやるかということなのですね。それは教科・領域のどの辺をどうやったらいいのか、その時に先生方がどう関わられるか、小・中の先生がね。</p>
G 委 員	<p>目黒でやっていたのは英語活動で、中学校1年生と小学校2年生と一緒にやるのと、あと、5年生と中学生と一緒にディベートを、国語の授業でやるというのがあったので、それはいいなあと思いました。</p>
A 副委員長	<p>教育目標のことなのですが、これは基底資料ということで、具体的にはまた作ってあげたいのですが、教育目標の構造とすると、法的には四小と二中というのはあくまでも二つの学校ということで、この大きな学園の目標の下にやっていると考えると、当たり前といえば当たり前かもしれないのですが、頭のところに、「義務教育9年間の系統的継続的な教育活動を通して」というような、ここは学園としての目標というのが明確になるような言葉が付くとより分かりすいかなと思います。</p>
事 務 局 ( 室 長 )	<p>他の委員さんから異論がなければ、そのように訂正して整理します。</p>
委 員 長	<p>よろしいでしょうか。まだあるようでしたら、準備室に連絡をとっていただきまして、一応さっと目を通しておきたいと思いますので、2章の方に入らせていただきます。「第2章 (仮称) 武蔵村山学園の教育課程編成基本方針」について、事務局から御説明願います。</p>
事 務 局 ( 室 長 )	<p style="text-align: center;"><b>第2章 (仮称) 武蔵村山学園の教育課程編成基本方針</b></p> <p>それでは、第2章について御説明します。(仮称)武蔵村山学園の教育課程編成の基本方針についてです。これまでの協議を踏まえ、4項目にまとめました。</p> <p>第2章1は教育課程編成基本方針として4点掲載されています。時間の関係で詳細については割愛しますが、1点目が「文部科学省学習指導要領に準拠する」2点目が「義務教育9年間の系統性・継続性に留意する」3点目が「人間力育成の4重点を教科横断的に位置付ける」、4点目が「児童・生徒の発達の状況を的確にとらえて編成する」です。</p> <p>第2章2は、各学年の呼び方、学年区分の名称、発達段階のとらえ方についてで</p>

<p>委員 長</p>	<p>す。1年生から4年生までを低学年部、5年生から7年生を中学年部、8年生と9年生を高学年部とします。つまり4-3-2のまとまりとします。</p> <p>第2章3は、1単位時間と生活時程表についてです。小学校45分、中学校50分の授業時間の違いをどうやって調整していくか、ということです。</p> <p>第2章4は、年間授業時数と総授業時数についてです。</p> <p>新教育課程の時数はどの学年も増加していますので、その対応については、一貫校だけの問題ではなく、市内全校に共通する課題の一つです。また、この課題の解決については、武蔵村山市立学校の管理運営規則等の改正が必要です。以上です。</p> <p>色々と豊富な内容を含んでおりますので、どうぞどこからでも結構でございますから御意見を、あるいは感想等をお出しいただけたらと思っております。</p>
<p>D 委員</p>	<p>例えば14ページのところに戻りまして、7時間目の授業の設定というところなのですが、どうしても中学校の場合は部活動の絡みというのが大きくて、今は4時から設定しているわけです。4時から6時ぐらいの2時間ぐらいの部活動というのは中学生の子供たちにとっては非常に大きい意味があります。また、発達段階においてもそれは必要だと思います。ですから現実には時程の組み方等で、配慮が必要だなというふうには感じます。</p>
<p>E 委員</p>	<p>最終的には中学もきっと45分授業になっていかざるを得ないと、私は思います。なぜならば、5年・6年に教科担任制をもってくると、全ての時間で教科担任制が揃っていかないと小回りが出来ないのですね。時間割が作れないと思いますね。日野学園も最終的には中学が45分にしました。だから中学校にとってはこれまでの授業に対する考え方、展開の仕方なども考えざるを得ないでしょうが、やはりそれはやっていかざるを得ないのかなと思います。部活の扱いにつきましては、私は私立の中学だったから、そんなに部活、部活とは言われなくて、ちょっとピンとこないのですが、D委員がおっしゃられたのはね。部活が好きな子は部活をやっていたらいいし、勉強が好きな子は勉強をしていればいいし、というような学校だったので。部活が重要であればやはり中学校が最終的には45分授業にすれば、短くなり、早く部活が始められるようになります。現在、一貫校設立への過渡期であるからこそ、非常に無理をしているような状況に見えるのです。だからお互い小学校と中学校がせめぎ合っている状況ですので、どっちかがちょっと折れてくれないと。で、どっちかが折れるにあたって、やはり先進校から学ぶべきと、思っています。きっといろんなことが先進校もあったと思いますから。基本的にはこれはこれで私はいいと思います。</p>
<p>C 委員</p>	<p>夏休みの授業設定については、5日間程度、午前4時間ということで、具体的な内容についてもよいと思います。もう少し具体的なことを考えていたのですが、す</p>

	<p>ぐ思い浮かびません。ただ、過ぎしやすいとはなかなか言えないと思います。</p>
委員 長	<p>今もやってらっしゃるわけですか。</p>
C 委員	<p>今は四小では「学習相談日」というのを設けて子供たちを呼んでやっています。こういった水泳の集中授業だとか、入試対策講座はきついかもかもしれません。職業体験とか、あとは林間学校、移動教室等の活動に使う分には、子供たちもそんなに苦にはならないのかなと思います。教室だけにじっと座っていることじゃない活動がよいと思います。</p>
G 委員	<p>秋季大運動会については、四小は春にやっているのですけれども。</p>
A 副委員長	<p>提言ということですので、具体的に示しながら訴えかけていくという部分の、要するにここに書いてあるとおり、学校だけでは決められない部分も提言という形で入れていかないと、あいまいになってしまいます。そういうところも含めて進めていくのが、具体的な検討のなかで、折り合いを付けていくのだらうなというふうに思います。</p>
委員 長	<p>あと1つだけちょっと気になったのは、10 ページの「(3) 人間力育成の4重点を教科横断的に位置付ける」、この場合は、「人間力の育成」というよりも、社会の変化に対応する課題を教科横断的に、それを4つと考えたわけですよ。「人間力」というのは3つなのです。だから言葉をどう整理したらいいかなと、教科横断的の方に力を入れるのであれば、むしろ「社会の変化に対応する課題を教科横断的に位置付ける。」これは中教審の答申がそういう書き方をしているわけですね、「人間力」だとむしろ3つ、知的なもの、関係力と、それから制御力、これが「人間力」の構成要素なのですね。「人間力」を養成するために、4つの課題を考えてそれを教科に横断するというふうになるのですが、「人間力」だと4重点という言い方にかかるるとちょっと内的な矛盾をきたすので、どちらを強調するかですね。私は文科省の答申が出ましたので、社会の変化というか、変化の課題に対応するとか、というような社会の変化に対応した課題を教科横断的に位置付ける。今まで検討したのは4つなのですが、新学習指導要領になるとこれがキャリアとかものづくりだとかというものも入ってくるので、増えていくことになるのかなという気はするのですけれども。学習指導要領の告示があつてから、はっきりすると思います。</p>
事務局 (室長)	<p>今、委員長から御指導のありました点については、昨年度の「武蔵村山市立小・中一貫校基本計画検討委員会プログラム部会」からの報告を踏まえ、「基本カリキュラム4重点」という用語をこの1年間、使用してきました。「言語力育成」「情報リテラシー育成」「キャリア教育」「心の教育」の4重点を、人間力育成の3要素「知</p>

	<p>的能力」「対人関係力」「自己制御力」で1年生から9年生まで横断的に構成されたカリキュラム表でまとめたものが、いわゆる本市の小・中一貫校基本カリキュラム4重点というように呼称してきました。</p> <p>ただし、基本カリキュラムは、いわゆる「育てたい力」「取り扱うべき内容」について一覧表にはなっていたのですが、それらを具体的にはどんな場面で育てるか、ということについては、明確ではありませんでした。つまり、平成19年度のカリキュラム作成委員会各教科・領域等部会で、4重点を各教科・領域等の授業で具現化するためには、どのような単元や教材が適しているかという検討をし、「指導場面の学習計画」を208案、各専門部会で作成していただきました。この「指導場面の学習計画」を「場面シラバス」と表現しています。人間力の育成を図る上で、4重点に着目し、教科横断的にこの4重点の具現化を図っていくということです。</p> <p>委員長 「人間力の育成」ということで、ここで挙げた4つというのは、本市が、私が委員長に着任する前からずっと研究しておられたので、取り上げた経緯があり、それらの課題を教科横断的に取り扱う。「言語力育成」とか、「情報リテラシー育成」とか、「キャリア教育」とか。「人間力」というのは「知的能力」「対人関係力」「自己制御力」の3つの要素から成り立っている。それを4重点とどう統合させようかということです。これを教科横断的な要素に取り入れていったらいいのではないかとということで、最初は、この4つの課題は、重点指導項目だったわけです。</p> <p>ただ「人間力」が4重点というところちょっと問題点が出てくるかな。「人間力の育成」というのは重点というか、3要素なのです。その3要素と、本市が課題としているものが4つあったと私は理解したわけです。本市はこういう課題の力をつけなければ、まあ重点指導と言ってもいいかもしれませんが。それは「人間力」の問題ではなかったわけですね。小・中一貫校として、どこを接続させるかということが問題になったので、接続させるためには「人間力育成」の3つの視点というか、ポイントというか、それとこの4つをどうかみ合わせるかということで、ああいう表を考えたそうです。4重点というと「人間力」は4重点かというふうに受け取れるので。むしろ「人間力」というのは、表に出すのであれば「人間力の育成」として、3つの視点を重視したということですね。それにもう1つ増やせば、教科横断的な考え方を取り入れたということですね。</p>
<p>事務局 (室長)</p>	<p>それでは、報告書の第5章の3 「基本カリキュラム4重点の場面シラバス」について、委員長から御指導いただいた点について明記するような原案の作成をお願いしたいと思います。特に、人間力育成と基本カリキュラム4重点の関係、さらに「社会の変化への対応課題4重点を教科横断的に取り扱う」という点について、明記するか、または第2章でそのような表現にさせていただくようにしたいと思います。</p>

委員 長	「人間力」を研究している人が見たら、「何で4つしかないのですか」というふうにとられては困るのです。
事務局 (室長)	「人間力」を構成する3要素を、具体的な教育課題を通じて具現化させるとしたら、どのような教育課題か、ということで、本市が継続的に力を入れて取り組んできた4重点が取り上げられたという理解でよろしいでしょうか。
委員 長	そうです。それは本市の課題として4つを取り上げたいというのがあったと思うのですよ。それをどう接続させるかというのが、一覧表になったわけですね。
事務局 (室長)	了解しました。それでは、その理解の下に、報告書の原案を再度、事務局で整理して、委員長以下、委員の皆様に御提出します。
委員 長	他に、私が読んで言葉を整理したらいいと思ったのは、11 ページ、先程申し上げたのですが、「学習基礎定着期」の説明として読んでみて、次の「学習充実期」の説明を読んでみると、どうつながるのかなということです。「学習充実期」の中に論理的とか、判断力、表現力というのは、むしろ発展期につながっていく内容なので、これが全く悪いというのではないのですが、例えば「学習習慣の確立」というのは、低学年であれば基礎的なもの、やはり生活習慣と学習習慣との形成をどう図るかというところを検討してほしい。あまり変えない形で、例えば高学年になっていきなり「個性の伸長」なんですけど、やはり高学年だと「個性の伸長」より「論理的な思考力、判断力、表現力を活用する能力」とか。これもピサの影響だと思うのですが。多少文言を、あまり大きく他のところに影響を与えない程度で、「なるほど、系統的だな」というのが読み取れるようにならないかなと思います。ただあまり大きく文言を変えてしまうと他のところに全部影響を与えますから、基本的にはこれでいいと思うのですが。
事務局 (室長)	それでは、委員それぞれが、期日までに代案を考えていただき、何かお気付きの点がある場合は、事務局までお願いします。
委員 長	それでは、3章に入らせていただいて、御説明をお願いします。
事務局 (室長)	<p style="text-align: center;"><b>第3章 (仮称) 武蔵村山学園の特色ある教育活動</b></p> <p>それでは、第3章を御覧ください。ここでは、武蔵村山学園の特色ある教育活動についてまとめていただきました。本委員会では、第2回と第3回の委員会で御協議いただいた内容です。本市の「特色ある学校づくり推進プラン」に基づき、一貫校としての特色であると同時に、他の学校でも実現可能な教育活動を10点、まと</p>

<p>委員長</p>	<p>めていただきました。</p> <p>1点目は、言語力育成です。漢字検定、日本の古典に親しむ活動、読書力の向上を目指す活動。</p> <p>2点目は、情報リテラシー育成です。情報モラルの育成、新聞教育の導入、コンピュータ等情報機器を活用した学習、学校図書室活用の推奨です。</p> <p>3点目は、キャリア教育です。職場訪問・職場体験、生き方を考える学習の実施、租税教育・消費者教育の実施です。</p> <p>4点目は、心の教育です。道徳の時間を重視すること、規範意識を育てること、礼儀の徹底です。</p> <p>5点目は、英語教育です。全学年で英語の時間を実施します。また、ALTの活用、英語検定の推奨、米軍横田基地内の小・中学生との交流です。</p> <p>6点目は、体力を高める教育活動です。新体力テストの導入、全校縄跳び大会、全校持久走大会の開催、スポーツ教室の開催、全校一斉外遊びの日、全校徒歩遠足の実施、歯磨き指導等です。</p> <p>7点目は、交流・体験活動の重視です。日本の伝統文化に親しむ体験や、宿泊体験の重視を示しています。</p> <p>8点目は、5年生からの一部教科担任制の導入です。これは、接続期の教育課程であるということを重視して、小学校学級担任同士の教科担任制や、中学校専科の教員による教科担任制が考えられます。</p> <p>9点目は、部活動の充実です。7年生以上は、部活動に全員参加を原則とします。また、5・6年生の希望者は、児童本人に参加希望がある場合、保護者の承諾を得て、部活動への参加を校長が許可することとします。</p> <p>最後に10点目は、幼稚園・保育園、高等学校、大学と連携した教育活動についてです。(仮称)武蔵村山学園は、市内の小・中連携教育の発信校としての役割を担っていることから、異校種と連携した教育活動を重視します。近隣の幼稚園・保育園との連携、あるいは都立上水高校や拓殖大学第一高等学校との連携、さらには国立音楽大学や東京経済大学村山校舎との連携等を想定しています。以上です。</p> <p>御意見を。思われたところで、結構でございますので。</p> <p>ちょっと最初に読んで引っかかっていたのが、17ページの情報リテラシーのところの、下から2つ目のところの、「携帯用ゲーム機のアプリケーションを利用したドリル学習等を推進」のところ、ゲーム機をここで持ち出してもどうなのかなというのがあります。それが1つと、19ページの英語教育のところ、一番下の英検の関係で、「6年生で英語検定5級」というのが出ているのと、「5 英語教育」の「(1) 全学年で英語の時間を実施」の3番目、5、6年生の「英語」となっているのですけれども、文科省の関係でいくと英語は一切やらないように、小学校段階では、文字についてはやらないようにというのが出ているようなのですが、とすると「英語活動」にしておいた方がよろしいのではないのでしょうか。</p>
------------	--

<p>事務局 (室長)</p>	<p>まず、「携帯用ゲーム機のアプリケーションを利用したドリル学習等を推進」については、市内の他の中学校においても、同様の取組を学力向上策の一環として導入する計画となっています。そこから得た知見を一貫校でも活用したらどうかということで、案に入っております。</p> <p>また、英語教育については、委員長御指摘のとおり、国の導入するものは、「外国語活動」の「英語活動」です。5・6年生で、35時間ずつ、導入されます。ただし、4年生以下では導入されません。しかし、本市では、ALTを導入して、1年生から英語活動を行っています。そこで、1・2年生では、10時間を特設した活動として実施。3・4年生では、総合的な学習の時間として20時間程度実施することを、構想しています。</p> <p>御指摘の英検については、これは、授業時間の中で英語検定用の指導をするのではなく、あくまでも児童の自主的・自発的な活動として英検受験を推奨するという意味です。現在も中学校では英語検定については推奨しています。もちろん、授業中に英語検定対策等を行っていないと思います。あくまでも生徒が自費で、自発的に受験するのですが、学校では、放課後等に生徒からの質問等に応える形で、支援をしているのが現状です。確認ですが、ここで示している英検の級については、あくまでも目安です。</p>
<p>委員長</p>	<p>私は読んだ感想としては、目玉がないなという気がしたのです。たくさん書いてありますが、何がこの学校の活動の特色なのか、私はそれをこう絞って、例えば4つのクロスカリキュラーはここでは挙げなくてもいいぐらいではないかなと、4つも重点的に教科の中に入れて謳っているわけですよね。それ以外にこんな活動をするのだという方がいいかなというような気もするのですが、全体を読んだ印象ではこの学園は何が目玉の学校なのか。活動のところに来るといっぱい挙がってくるので、またこう拡散してしまうというような気はします。例えば新聞教育まで入れてきたので、これだけ入れるとしてもNIEだけでも大変なのですね、これをやるとしたら。私も面白いとは思うのですけれどもね。私も江東区の学校と一緒にやったことがあるのですが、これ1つだけでも大変でした。</p> <p>「4心の教育」まではね、クロスカリキュラーとしてやろうというわけですから、それがどう活動に反映するかについては教科・領域の中で反映する、教科・領域のなかで4まではとにかく入れていくわけですよね、この学校は。それ以外にこんな活動もやるのだというようなものを、というふうにしていくつか挙がるというのは良いと思うのですが。これを全部並べると10個並べられるということでしたか。内容的には少し違うものもありますけれども。「9部活の充実」などは、これは必要だろうとは思いますが。特色ある教育活動、1つはクロス的なことの、これは特色ある教育活動なのですよね、その中に4つのファクターが入って、それ以外にも英語活動をやるとかね、というのがいいと思いますね。</p>

G 委員	いずれにしてもこれは例示として位置付けていただかないと、ちょっと全部出来ないと思います。それが分かるような文面を入れていただきたい。
A 副委員長	実際にこれを基にして、小・中一貫校が検討をするということですから、具体的にやるという意味ではないと思います。ただその例示として、挙がっているのと挙がっていないのでは考える時の方向が違ってきますから。
事務局 (室長)	了解しました。もともと、この特色ある教育活動については、一貫校として目指す教育活動の例示としての位置付けであり、一貫校の校長先生が、御自身で教育課程を編成する際に、つまり実践的な教育課程を編成するときに選択する、あるいは考える際の一助とするためのものですから、そのような表現をとるように留意したいと思います。
G 委員	ドリル学習だと、セコムのもので家でも使えるし、履歴にも残りますね。
委員長	ドリルは、私の学習方法論からすると、使う必要はないと思うのですが、お金を使うことはなくてね、ペーパーで出来るのですよ、ドリルは。ただエンターテイメントエデュケーション、エデュテイメントというか、エデュテイメント的なものが一時アメリカで流行ったのです。結局失敗してしまったのですね。ゲームをやりながら勉強できる。いろいろなキャラクターが出てくる面白さであって学力のほうには全然関係ないというような報告も出てきています。日本もコンピュータを入れてある学校でそういう学校もありますけれど、私が見たかぎりでは成功していないですね。色々なキャラクターが出てくるというのが子供にとって最初は物珍しいのですが、もうすぐにはいやになってしまっ、それには魅力を感じなくなってしましますね。コンピュータやゲーム機など、そういうところにお金をかけるなら、もっと違うところにお金をかけたほうが、学力は向上すると思っていますけれどもね。
E 委員	思い切って公文式でも導入したらどうなのかなと思うぐらいですよ。前いた学校で、やる気のない子が、公文へ通い始めて面白いと言いだしました。どういうシステムで、どんなテキストを使っているのか見たくったのですね。
委員長	結局あれは出来たという喜びがあるわけですよ。その場でマル・バツしてくれるので、これは、教育学では即時強化というのですが。即時強化されると、やる気が出るというわけです。 このところが、A副委員長もおっしゃったように1つの例示というのですか、そんな考え方が色々あるよということを最初にお書きいただいて挙げていただくと、あるいは4つの要素についてはクロスカリキュラーも重視しているよというようなこともあってもいいかなと思いました。

<p>事務局 (室長)</p>	<p>そうしますと次は、第4章のところを御説明願います。</p> <p><b>第4章 (仮称) 武蔵村山学園の学園名、学園歌等</b></p> <p>ありがとうございました。それでは、続いて、第4章 (仮称)武蔵村山学園(仮称)の学園名、学園歌等です。これは、第4回委員会で御協議いただいた内容を踏まえております。</p> <p>本市の小・中一貫校は、これまでの協議の中でもご説明してまいりましたが、第四小学校と第二中学校が統合して一貫校となるものではありません。両校の校名、校歌、校章等は存続します。しかし、一体型一貫校となるわけですから、1年生から9年生まで一堂に会した際に、つまり、一体的な教育活動を展開する上で「愛称としての校名」が必要となります。また、日常的に1年生から9年生までが歌え歌としての愛唱歌が必要となります。さらに同様な点から、小・中一貫校としての一体感を示すシンボルマークが必要と思われます。このことは、これまでの委員会、第4回までの委員会でも各委員から特に異論がなかった点です。</p> <p>続く標準服の導入については、導入の可否自体を検討する必要がある、という結論だったと思います。つまり、本委員会で標準服を導入すべき、あるいはすべきではない、という固定的な方向性を示すのではなく、標準服の長所短所等を示すことにとどめ、導入については保護者、地域の方と協議していく必要があるということです。</p> <p>以上を踏まえ、それぞれの導入の背景と意義、組織、活動計画案等についてまとめて頂きました。</p>
<p>委員長</p>	<p>提言の形で、つまり、“こうしなさい”という形ではなくて、“こういうスケジュールでこういうふうを考えていったらどうでしょうか”ということであろうかと思えます。いかがでございましょうか。</p>
<p>D 委員</p>	<p>標準服については、実は今年新1年生になる子供たちは、開校当時中3になります。来年度の新入生の保護者に、制服が決まっているのなら、そちらを買えないのかと言われました。もっと早い段階で、標準服が出来ていれば買いたいという保護者の方もいらっしゃいます。</p>
<p>事務局 (室長)</p>	<p>それは、“着たい”ということなのでしょう。</p>
<p>A 副委員長</p>	<p>買い換えることになったら、ということですね。来年買ったのにまた買わなくてはいけないというか、替わるのであれば替わる制服を着たいということですね。</p>
<p>D 委員</p>	<p>そうです。今、第二中学校は詰襟です。一貫校になれば、当然新しい制服になる</p>

<p>教育部長</p>	<p>と予想しているわけだと思うのです。女子の場合も違ってくるのだらうと思っ ているのです。そうすると、1年間ならばいいのだけれども、2年間そこに入るので あれば、早めに決めてほしいという保護者の意見もなるほどと頷ける部分がありまし た。</p> <p>私がお伺いしてしまして、いずれにしても、いろんな意見が出ましたので、やは りこれらをまとめていかなければ、事務局として、まとめていく必要があると。た だ問題なのは、いわゆる部会とのつながりといいますか、そういう部分もございま すので、事務局のほうで今日出た御意見につきましては出来るだけ反映させるよう な形で、尚且つ従来やってきた骨子が崩れないようにそんな形で持っていければな と、こんなふうに思っております。ただ今出た制服につきましても、小・中一貫校 の説明会を10月に5日間かけてやったのですけれども、その中でもやはり保護者 の方が、やはり標準服は欲しい、欲しいけれども1回買ってしまっただ直ぐまた作る のはどうなのですかと、そういう部分のお話も多々ありましたので、その辺につき ましましては、事務局の方も十分承知しておりますので、この標準服の検討委員会が出 来た場合には、そういった保護者の声も事務局から御説明を申し上げ、よりよいシ ステムの中で導入出来ればと、こんなふうに思っております。</p>
<p>事務局 (室長)</p>	<p>それでは、時間がだいぶ過ぎています。ただいまの協議を「(仮称)武蔵村山学園 の教育について(案)」の中に反映させ、再度、各委員のお手元にお送りします。来 月、3月末に製本するためには、遅くとも2月末までに加除修正等、御意見をお寄 せ頂きたいと思えます。委員の皆さんから集まった内容に基づき、報告書を訂正し、 最終的には、委員長、両副委員長に再度御確認いただいた上で、発行していきたい と思えますので、宜しくお願いします。</p>
<p>教育部長</p>	<p>それでは最後にあたりまして、一言お礼の御挨拶をさせていただきたいと思いま す。本当に委員長をはじめ、委員の皆様、ありがとうございました。特に委員長に は2年連続ということで大変お力添えをいただきましてありがとうございました。 私は先生方の教育の中身は中々わからないのですけれども、武蔵村山市の教育にと って、学力の問題だとか、体力の問題だとか色々ありますが、やはり何かアクション を起して、方向性を変えていく必要があるというふうに常々考えております。そ れがこの小・中一貫校が武蔵村山の教育を変えていく第一歩だというふうに認識し ております。従いましてカリキュラムと平行して、施設整備の方も当初に比べてち よっと縮小はしたものの、やはり両校が連携しやすい形に整備していきたいと、こ んなふうに考えておりますので、是非また今後とも委員長はじめ、本委員会の委員 の皆様におかれましてはお力添えをいただきたいとこのように考えております。本 当にありがとうございました。</p>